

個人でしのぶ手元供養

遺骨など身近に置き 既成宗教には頼らず

遺骨やその加工品を身近に置き、故人をしのぶ「手元供養」が広がっている。提唱されてまだ10年にもならないが、死者をめぐる文化の一角に定着しつつあるようだ。特定の宗教を介さず、見えない近親者を近くに感じる。そのありようは「千の風になつて」の歌が大ヒットした時代の心象とも重なる。

(磯村健太郎)

死者より残された者の悲しみ癒やす

大阪府泉南市の真如寺（浄土宗）の長松真也住職（34）は、遺骨や遺灰を特殊加工した合成ダイヤモンドを埋め込む、クリスタル製の位牌を考案した。伝統宗教の側から新しい追憶のあり方に歩み寄った形だ。地域にもよるが、仏式で



《ダイヤ位牌》戒名の上に合成ダイヤモンドが埋め込まれる。150万〜180万円。ダイヤは溶かして、家族の遺骨を新たに混ぜることもできる。泉南市の真如寺

【手元供養を選んだ理由】

（一部、複数回答あり／06年調査）

- 故人の一部である遺骨は仏壇や位牌より身近に感じられる 59人
- そばに置いてあげたかった 55人
- 持ち歩くことができ、いつも一緒にいる感じがいい 29人
- 祭祀（さいし）の継承者でない者でも祭祀（供養）ができる 12人
- 墓が遠くにあるから、身近で供養したかった 12人
- 故人が散骨を望んだので、何か形を残したかった 11人
- 子供に負担（仏壇を買うなど）をかけたくない 10人

愛する人への「私だけの小さな物語」

『ホネになつたらどこへ行くのか』の著者、南山大学大学院生の内藤理恵さんは昨秋の日本宗教学会での発表で、手元供養を受け入れる土壌に「魂の依代」としての位牌の習俗がある

と述べた。それを「脱宗教」化したのが手元供養であり、「本尊を通さなくてもダイレクトに故人とつながりたい、といった気持ち」が普及の背景と指摘した。

既成宗教よりも「千の風になつて」のような「死者からのまなざし」に親しみを感じる人々は少なくない。そのような人と手元供養の支持層は重なっているともいえる。

駒沢大学の池上良正教授（宗教学）は「伝統的な死者供養を補うものとして」

部分と現代に受け入れられる工夫とのせめぎあいだ。手元供養は、遺骨や遺灰を小さな骨つぼやペンダントに入れておくのが主流だ。05年にできたNPO手元供養協会（事務局・京都

市）によると、年に推定1万個以上の関連商品が売られている。東洋大学の井上治代准教授（社会学）は「故人の一部であるという確かな存在感」が核家族になじむと見る。商品購入者1000人への調査からは、複数の動機がからむことが確かめられた。

しかし、そもそも供養とは「不安定な死者」を「安らかな状態に導かれた死者は生者たちを守ってくれ

る」。それに対して手元「供養」は残された者の悲嘆を和らげる「グリーフワーク」の意味合いが強い。手元供養の名づけ親でもある同協会の山崎謙二会長（59）は「供養という仏教用語には抵抗感もあったが、悲嘆の重さを見ると一番近いと思った」と明かす。手元供養品は「パーソナル・コミュニケーションツール」。一人ひとりが姿なき者と「交感」するための回路という。



《DNAペンダント》中の容器にDNAを付着させたビーズを入れる＝愛知県稲沢市の「永和工業」



《納骨型》右の「地蔵」は高さ約13センチで、中には小さな骨つぼ。左は竹製で持ち運びしやすい。京都市の「博國屋」

「大きな物語」にどこか違和感を持つ人々が、愛する人をめぐる自分だけの「小さな物語」をつむぎ始めているのかもしれない。